

氏名（本籍）	稲葉友宏（栃木県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲博第3号
学位授与年月日	平成23年3月20日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	彫刻表現における[空白]の可能性
論文審査委員	主査 本学教授 大 沼 映 夫 副査 本学教授 林 香 君 副査 本学准教授 沼 尻 真理子 副査 宇都宮美術館館長 谷 新

## [ 論文内容の要旨 ]

論文構成

序章

第一章 「空白」をもった彫刻表現の研究の現在～2010年～

第二章 「空白」をもった彫刻表現の制作

第三章 彫刻表現における「空白」の可能性

おわりに

謝辞

図解

本論文は、彫刻表現に「空白」という新たな概念を用いることで、考えられる可能性について研究した内容を論じたものである。

最初に、本研究で論じている、「空白」という言語を彫刻的表現用語として用いるに至った経緯とその解釈について触れておきたい。

私は、彫刻表現を行う上で、見る者と想像を介した関係を持ち続ける芸術作品が、芸術表現として機能していると考え、目標としている。そのように、見る者と想像を介した関係を持ち続ける表現の在り方を実現する為には、表現にどのような要素が必要と成るのか模索したのである。その過程において、人が具体性の欠如した物事に対して、興味を持ち、自発的に想像を抱く傾向にあることが考えられた。したがって、意図的に表現の具体性を欠如した状態にする事を試みたのである。よって、そのように意図的に作られた表現の部分的欠如を「空白」と称し、研究のテーマに用いたのである。

以上の様な経緯を経て彫刻表現における「空白」の研究を始めたのである。

「空白」をもった彫刻表現は、現在二つの異なる方法によって表現を試みる研究が進行している。現在進行中に在る二つの表現方法とは、以下の通りである。

- ① 彫刻表現に見られる表現の具体性を消失させる事で欠如した状態にし、「空白」をもった彫刻表現を試みる表現方法
- ② 文脈的構成によって生じる意味の放棄によって「空白」をもった彫刻表現を試みる表現方法 この表現方法は、複数のモチーフによって作品を構成し、それらの関係性を明示しないことで、作品に表現される世界観や意味が放棄された表現となり、見る者の想像によって機能するという考えを持った表現方法である。

このように、二つの表現方法があるが、②の表現方法に比べて、①、の表現方法の方が、先に研究を始めた為、「空白」をもった彫刻表現の研究において、或る程度の成果が見られる。したがって、現在、研究が進行する中で、成果が見られた①の方法を本論文の軸に採り上げて論じている。よって、本論文では、「空白」をもった彫刻表現を行う一つの手段として、作品の具体性を感じられる表現に意図して消失した部分を作ることで、見る者の想像を喚起する効果を期待し、同時に想像したイメージを受け入れる効果も期待したものである。つまり、見る者に想像というものの見方を求め、その想像によって、彼ら一人一人の解釈が生まれる効果を期待した表現の研究である。したがって、そのような具体性の消失によって「空白」をもった彫刻表現を研究する為に、実際に「空白」の効果を用いて彫刻作品の造形を試み、完成した作品の展示を通して見る者との対話から、「空白」の

概念を用いた彫刻表現に見られる造形の効果を調査し、「空白」の概念をもった彫刻表現の可能性について、研究を行ったのである。その研究において、「空白」の概念により彫刻表現に見る者の想像によって、見る者の数だけの解釈が生み出されている場面が見られた。そのことから、「空白」の概念を用いて造形された彫刻表現に、常に生産性のある可能性が考えられ、彫刻表現の新たな可能性として期待できる結果となった。

本研究を通して、期待することができる、「空白」をもった彫刻表現の可能性をより深く研究する為に、次の三つの研究が考えられた。

その1、造形的観点から考えられた可能性を研究する『形態表現における造形性の研究』

その2、本研究を通して、見る者が想像したイメージを他者と共有する様子に興味を持ち可能性が考えられた事から成る『「イメージの共有」の研究』

その3、本研究で、自身の彫刻表現に一つの基礎と成る理論を得る事ができたことから、更に美術史に残る彫刻家の思想を参照し、自身の理論と比較する事で、「空白」の概念について研究を深めたいと考えた事から成る『「空白」の概念の研究』

以上のように、本論文は、研究の結果から考えられる新たな研究の方向性を挙げることで、本研究の一つの節目としてまとめている。

## [ 審査結果の要旨 ]

近代以降の彫刻には、国の内外を問わず、量塊性（マッサ・ボリューム）と造形性（フォルム）を軸とした表現が多様に試みられてきたが、稲葉友宏氏の論文は、彫刻が具有する物質的条件をベースにその対極にある「空白」を主題目として、魅力的な観点から論じ、実制作に結びつけている。

本論文で言う「空白」とは「意図的に作られた表現の部分的欠如」を言う。本来、彫刻作品は「空間芸術」として「実空間」と「虚空間」から成る立体的造形（フォルム）である。ここで言う「実空間」とは作者の手によって、物質的素材を彫琢し、造形を加えることによって生じた三次元的空間であり、「虚空間」とは「実空間」が形成されると同時に生ずる、内部的虚空間と周辺に広がる虚空間の両方を指す。こうした「実空間」と「虚空間」から成る芸術世界が彫刻制作によって世界へともたらされると言えよう。通常「彫刻」と言うと、冒頭にも述べたように、量塊性（マッサ・ボリューム）と造形性（フォルム）に目が行きがちである。

つまり、「実空間」が注目されがちなのであるが、彫刻の実作者の立場から、一転、鑑賞者の立場に立って見る場合、「虚空間」は特別な重要性を帯び始めると考えることができよう。

稲葉氏の論文の優れた点の一つは、氏が彫刻家の立場にありながら、自己の作品制作を鑑賞者の観点に立ってその効果を考察しつつ研究を進めている点にあると言えよう。鑑賞者は、彫刻作品の「虚空間」に想像力を掻き立てられるであろう。筆者（作者）は、鑑賞者におけるこの想像作用がもつ可能性の広がりについて注目している。即ち、彫刻芸術が本来もつ機能のうち、この側面に焦点を当て、独自のコンセプト、即ち「空白」という概念を提示したのである。

従って、その制作もこの新たなコンセプトに従うものである。鑑賞者の想像作用の参与は、従来彫刻がもたらす効果の一契機にすぎなかったと考えられるが、稲葉氏は、この契機のもつ役割の重要性を大きくとらえることによって、新しい概念を打ち出したと言える。「空白」の語は従って本論考において、新たな概念規定を得ていると言えよう。

さて、昨今の芸術をめぐる状況は環境や需要の変化に伴い、主としてデザイン領域の急速な隆盛と伸長という局面を見せており、その中で「純粹美術」として、むしろ伝統を墨守する感のある彫刻の領域は、今後の在りかたを模索する必要に迫られていると言えよう。そうした中、本論考は、この現代的課題に独自の視点から一石を投じた、斬新にして将来性のある試みとして評価しうると考えられる。今後の作者の制作活動の進展を見守り期待したいものである。